

住友の歴史から

平成28年9月3日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山についてこんなにコンパクトにまとめられた冊子はない。住友商事(株)の職員研修のテキストとしてまとめられたからである。平成10年に南米ボリビアのサンクリストバス鉱山の人たちを旧別子へ案内したのを契機に、住友商事(株)の職員研修の現地案内をはじめ7年目になる。昨年は12回銅山峰まで登山した。事前学習として住友マンも「住友の歴史から」を読んだから登山しているのだから、案内者としても読んだ。現地案内から再発見したことを含めて紐解いていく。

2. 本の刊行

昭和52年1月~昭和54年3月 住商ニュースに12回掲載

昭和54年12月 初版本 B6サイズ

表紙は鼓銅図録の南蛮吹きの図

(重版本あり)

平成17年12月 改訂版本 A5サイズ

表紙は開坑二百年記念時に描かれた別子銅山図と鼓銅図録の南蛮吹き及び棹銅計量の図の線画

3. 本の構成

第一部 住友の歴史

第一章 住友精神と「文殊院旨意書」

第二章 業績を固めた南蛮吹き

第三章 大阪の銅産業と住友

第四章 吉岡銅山と別子(立川)銅山

第五章 金融業への進出と別子・立川の統合

第六章 住友中興の元勲 広瀬幸平

第七章 伊庭貞剛と住友の近代化

第八章 事業は人なり 住友の人材

第九章 住友の諸事業の誕生

第十章 住友精神と社会貢献

資料 住友の略年表・住友グループの発展略図

コラム すみとの商標

第二部 住友商事の歴史

第一章 住友の禁を破って誕生した住友商事

第二章 住友商事 大手総合商社に発展

4. 内容と注目箇所

第一部 住友の歴史

第一章 住友精神と「文殊院旨意書」

◆宗派を離れ、薬舗・書林を開く

家租・住友政友と業租・蘇我理右衛門の二人から始まる。理右衛門は政友の姉婿であった。理右衛門の二代目友以、通称理兵衛は住友家銅業の創始者となり、後に政友の婿養子となる。政友の「文殊院旨意書」は住友家法の基になった。理右衛門の「南蛮吹き」は銅の住友の出発点となった。

政友は丸岡に生まれ京都に上り、新宗派の涅槃宗の高弟となり空禅と称し、文殊院とも号した。やがて他宗門の反感と幕府の宗教政策から解宗、統合される。文殊院は門外沙門と称して富士屋嘉休と名乗り薬舗・書林を開く。

薬舗・書林—医薬と出版の業は当時最先端の職業であった。仏教者から町人になって2つの職業を選んだ政友が進取の気質に富み、人類への根本的命題への挑戦を恐れない人物であることがよくわかる。「衆生済度」「悉有仏性」の思いを新たにして世俗の職業を通じて民衆救済を具体的に取組もうとした員外沙門の考えが明確である。

右衛門—理右衛門や理兵衛と人名に使われているが、右衛門、左衛門、右兵衛、左兵衛などは、御所護衛を本務とする官職であった。

P 0 7 初版本の文殊院の写真は裏焼き。(着物の襟が左前になっている。) 第二版で直している。なお、写真は表焼きに直したのではなく、差し換えているのが数珠の輪が一重から二重になっているので判明する。

奥付を見ると、初版本は「発行日 昭和五四年一二月」、第二版は「初版発行 昭和五四年一二月」となっている。

◆文殊院旨意書

文殊院旨意書は、家人の勘十郎に宛てた政友晩年の五ヶ条訓戒の書状。政友の処世感が凝縮された住友精神の原典ともなった。

P 0 8 文殊院旨意書から少し離れるが、この世に処するには正直・慈悲・清浄を本

とするという精神は、後に、友以夫妻に与えた遺戒にも脈打っている。その中で注目すべきは神祇に対する崇敬である。いわゆる「三社託宣」に対する信仰を強く論していることである。

文殊院旨意書

商事は言うに及ばず候えども、万事情に入らるべく候。

- 一、何にても常の相場より安き物持ち来たり候えも、根本を知らぬものに候わば、少しも買い申すまじく候、左様の物は盗物と心得べく候。
- 一、何たる者にも一夜の宿も貸し申しすまじ。また編笠にても預かるまじく候。
- 一、人の口合くちあいい、せらるまじく候。
- 一、掛商かけあきない、せらるまじく候。
- 一、人何ようのこと申し候とも、気短く、言葉あらく申すまじく候。何様重ねて、眞つぶさに申すべく候。 以上

孟春十日

草名（花押）

文殊院旨意書の解説

文殊院旨意書は、住友の家法・家訓の源流に置かれているが、家人の勘十郎に宛てた政友晩年の五ヶ条訓戒の手紙である。政友の処世感が凝縮された住友精神の原典ともなった。

古文書なので後から「文殊院旨意書」と名前を付けている。上からの主旨を示された文書の意なので、受領者が上級者から下達されたことが表現されている。受領者本人か子孫か不明である。

「商事は言うに及ばず候えども、万事情ぜいに入らるべく候。」といきなり切り出し、商売はもちろん、すべてのすべての職業についての心構えを述べている。家や家職の存続を目的とはしていない。住友の家業は銅製錬業と鉱山業で、商業は副業なので家訓とは言えない。「万事」についての取り組みの姿勢は、文殊院が武士身分と僧侶の地位捨て、商いの道に転身を図った人物としての姿勢が教えているところである。

署名は「臨西」を用いている。天保4年(1649)10月、清凉寺の一院内に移り住んで以後に用いた。

文書は表層の文様からして江戸時代後期から明治初期の間に、掛物として軸装されたと考えられる。箱書には「宝暦辛巳(1761)四月」の日付がある。箱のラベルには「政友君御旨意書」とある。明治以降のもののようなものである。

「万事情に入らるべく候」の「情」は今日の「精」にあたる。「情に入る」は「心をかける、細かなところまで注意する」の意味。

1条から4条までの「ふだんの相場より安いもの、出所の明らかでない品物は盗品と心得て買うな、誰であろうと宿貸しは禁止、他人の仲介・保証・掛け売り・掛け買いの禁止」は、当時の治安情勢を反映し、町単位、家単位で自衛・自警をはかり、取引における文書主義を徹底したもので、法の順守を説いた箇所である。

5条の「人何やうの事申し候共、———」は、対人対応の在り方を述べた箇所である。他人がどのようなことを言っても、短気を起こして声高に争うことなどをせず繰り返し丁寧に説明するように説いている。

最初の行間にある2行は、追筆である。与介に髪結い株を買ってやることを勧め、その金を出すのはお前さんだけでよかろう、と言っている。

箱の中にあった書付から、大正2年(1913)7月、天王寺公園で開催された大阪市関西教育博覧会に出品されたことが分かる。

正直は天照皇太神、清浄は八幡大菩薩、慈悲は春日大明神の徳目である。三社託宣の信仰は江戸時代まで広く信仰されたものである。歓喜坑、歓東坑の護符の中に出ている。

三社託宣

- 八幡大菩薩** 鉄丸ヲ食スト雖モ、心汚ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅焰ニ坐スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ至ラズ。
- 天照太神宮** 謀計シテ眼前ノ利潤ヲ為スト雖モ、必ズ神明ノ罰当ル、正直ナラバ一旦依怙(たより)ニ非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル。
- 春日大明神** 千日注連(しめなわ)ヲ曳ク外雖モ、邪見ノ家ニ至ラズ、重服深厚ク外雖モ(重い忌みがあっても)慈悲ノ室ニ赴クベシ。

- 八幡大菩薩のお告げは、たとえ鉄球のような堅い物を食べても、心の汚れた人の物を受けない。たとえ銅の焰の上に座っても、心の汚れた人の処に行かない。

- 天照太神宮は、いろいろとたくらんで目の前の利益を得たとしても、必ず神明の罰が当たる。

正直であれば一旦不利になっても、最後には日月の憐みを得られる。

- 春日大明神は、長らく注連をはって神聖な処としていても、そこにいる人の心がまがっておれば行かない。重い忌のある家でも、慈悲の心を持った人がおれば、その家に訪れます。

護符の記述

別子開坑二百五十年史話の28ページに坑口の護符について次のように記述している。

『別子立川、歛喜歛東当用鋪内大略図』に、その間符口の結構が画かれ、向かって右、第一の柱に、天照皇大神、第二の柱に、八幡大菩薩、第三のそれに不動明王と書してあり、向かって左の柱、第一に春日大明神、第二に山神宮大山積大明神、第三に薬師如来と認めてある。」

住友別子鉱山史・別冊の15ページには「四ツ留と祭神」の図が出ている。

入口に向かって 右手 1 天照皇大神

2 八幡大菩薩

3 不動明王

入口に向かって 左手 1 春日大明神

2 山神宮大山積大明神

3 薬師如来

三社託宣

伊勢（天皇の祖神）・春日（貴族の祖神）・八幡（武家の祖神）の3つの神の託宣を三尊形式にするしたもの。元来は別々に唱えられていたものが、三尊形式にまとめられた起りは、応永年間（1288年～92年）に奈良東大寺東南院においてであろうと言われている。

護符や貼り札のような礼拝用として吉田神道の発展とともに室町時代から民間に流布する。吉田神道は室町幕府の八代将軍・足利義政の妻・日野富子の信任を受けて朝廷にまで影響力を及ぼした。そして江戸幕末まで神社界を支配した。伊勢神は正直を、八幡神は清浄を、春日神は慈悲を最要とすることをすすめ、3つの徳目は伊勢神宮、石清水八幡宮、春日大社で特に強調された。

天照皇大神宮（てんしょうこうたいじんぐ）

謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に当る

正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終には日月の憐を蒙る

八幡大菩薩

鉄丸を食すると雖も、心汚れたる人の物を受けず

銅焰に座すと雖も、心穢れたる人の処に至らず
春日大明神
千日の注連を曳くと雖も、邪見の家に至らず
重服深厚たりと雖も、慈悲の室に赴くべし

それぞれの神、仏

①天照皇大神

太陽を神格化した神。皇室の祖神の一つとされる。日本の神の中で最高神の位置を占める。高天原の主神となる。絶対神(怒り罰する神、守り叶える神)。

イザナギノミコトとイザナミノミコトの夫婦神が「国生み」で8つの島々を生んだ。淡路島、四国、隠岐島、九州、壱岐、対馬、佐渡島、本州である。次に、「神生み」で万物を生成して、農耕に適した肥沃な土地「豊葦原の瑞穂の国」を生んだ。イザナミミコトミコトが最後に火の神を生んだ直後に命を落とす。黄泉の国から帰ったイザナギノミコトが日向で禊をしたとき、左の目を洗ったらアマテラスオオミカミが、右の目をあらうとツキヨミノミコトが、鼻を洗うとスサノウノミコトが出現した。アマテラスオオミカミは太陽の神であり、高天原を治め、ツキヨミノミコトは夜の世界を、スサノウノミコトは海を治めよと命じられる。

②春日大明神

神護景雲2年(768年)藤原不比等によって、常陸国・鹿島から藤原氏の氏神・武甕槌命(たけみかづち)を春日野に勧請して祀ったのが始まり。下総国・香取神の経津主命(ふつぬしのみこと)、天の岩屋で祝詞を奏上した祖神である枚岡神の天児屋根命(あめのこやねのみこと)を合祀し、その後、それぞれの斎主の比売神(ひめかみ)を合祀して4神を祀って氏神とする。

興福寺を氏寺とし、神仏習合のもと藤原氏の繁栄に伴って隆盛する。朝廷も重視し、武士、豪族も祭礼に参加するようになって次第に民衆の強い関心を引くようになる。何か事があった時に、進むべき道を指し示してくれる神として崇められ、江戸時代には各地に春日講も結成される。

③八幡大菩薩

神の依り代の旗がなびく様子から託宣を告げた新羅・加羅の神を5世紀ころに北九州に渡来した鍛冶、金属鑄造の技術集団の秦氏が持ち込み、銅採鉱をした香春山を神体としたのが原始八幡信仰。宇佐神宮の銅鏡を鑄造した。

八幡神の総本社は宇佐神宮である。宇佐地方の大神氏の氏神であったが、欽明天皇(509年)からの時代に、いろいろな奇端を表し、応神天皇の神霊とされて大和朝廷の守護神となる。神亀4年(727年)隼人の乱の征討に赴く。天平19年(747年)、奈

良の大仏の建立の国家事業を「八幡神が天神地祇を従えて銅の湯を水とし、わが身を草木土に交えて大仏を鑄造しよう」とお告げをして助ける。鍍金の金不足も東北で金がとれると予告する。神護景雲4年(770年)道鏡の皇位継承の野望を阻止する。純友・将門の乱で調伏が石清水八幡宮で祈願され、平定して国家鎮護の神として崇敬される。鎌倉幕府が開かれると国家鎮守の神に石清水八幡宮から勧請して、鶴ヶ岡八幡宮として祀る。

④山神宮大山積大明神

天照大神の兄神。名前は偉大な山の神霊。そこから鉾山の守護神となる。水源や田の稔も支配するので、水の神、田の神としても信仰されてきた。別名を和多志大神で、海の神霊も兼ねている。

のちに火の神から生まれた山津見八神が出てくることから考えて、山に住む神が各地にあり、それらの山の精霊を総支配した神でもあったとも考えられる。

「伊予風土記」逸文の中には、仁徳天皇のころ、百済から渡来した神であるとされている。

⑤不動明王

仏の教えに従わない救い難い衆生を恐ろしい姿で威嚇、屈服、救済する五大明王の中心で、最も威力、興徳も大きい明王である。大日如来の命令でこの世の悪を断つ。悪を罰するだけでなく、修業する者を護る仏である。

如来、菩薩が「静」の仏に対して、明王は「動」の仏である。

不動明王の信仰が広まったきっかけは、平安時代初期の平の将門の乱。なかなか手に負えない平の将門を調伏するために京都の高尾山神護寺から不動明王像を借りて関東の成田の地で調伏の法を行った。京都に戻らずそのまま新勝寺の本尊になった。

そして、お不動さんを決定的に庶民に浸透させたのは、鎌倉末期の元寇。この時に敵国退散の呪法が各地でおこなわれ、その主役は不動明王だった。

また、庶民信仰の中では疫病退散の仏として信仰を集める。山伏が里人に頼まれて病氣治癒の加持の護摩を焚き、不動明王に祈った。憤怒の形相で悪魔を降伏させ、仏道に従わない者を無理やりにでも導き救済する半面、病を癒す治癒仏でもあるという二面性を持っている。現代でも病氣平癒を祈願するのは、薬師とお不動さんが多い。

江戸時代まで庶民の信仰があつかった修験道は、明治の廃仏毀釈で信仰が断たれる。

青黒の肌色、軽装の装束はインドのカースト制度の最下層の奴隷である。行者に付き従いそれを守る存在である。

不動明王としてよく知られているのに、大阪の法善寺横町にある「水掛不動」がある。正しくは、天竜山法善寺、西向不動明王。病氣平癒、商売繁盛、恋愛成就などでお参りが絶えない。

⑥薬師如来

薬師如来は西方極楽浄土の阿弥陀如来に対して東方浄瑠璃界の教主。その名のとおり医薬を司る仏で医王尊という別名もある。衆生の病気を治し安楽を与える仏である。

菩薩であったころ、12の大願を立て、その7番目の願いが「病のものも私の名前を聞けば患いがのぞかれる」とあって、これが薬師信仰の根拠とされている。阿弥陀如来が来世での安らぎを約束しているのに対して、薬師は現世での安らぎを求める点が異なっている。死後の不安に対する安寧の方が、「喉元過ぎれば」のたとえのごとく現世利益より強く、薬師より阿弥陀信仰の方が強い。

第二章 業績を固めた南蛮吹き

◆南蛮吹きの新技術を開発

蘇我理右衛門は、法号を寿済と称した。政友の義兄であったが涅槃宗では門弟であった。河内出身で京都の寺町五条で屋号を「泉屋」と称し、銅吹き、銅細工の店を構えていた。やがて南蛮人か明国人から銀銅吹き分け技術を習得する。理右衛門は苦心惨憺の末に南蛮吹きを完成させる。

16世紀の日本は産銀の黄金期を築く。17世紀は銀に代わって銅の輸出国となる。理右衛門の業績史蹟として京都東山の方広寺に大仏と釣鐘用の銅を納入した。寛永13年(1636)、65歳で没し、浄蓮院に葬られた。

P 1 1 **当時の銅吹き技術は全くの揺籃期にあった。戦国諸大名勲賞で、金銀銅山の開発は盛んに行われていたが、冶金技術は手探り時代であった。特に、銅鉱石の中に含有されている金銀を抜き出す技術は、まだ日本にはなく、それまでの銅は金銀を含んだまま使用され、また海外に輸出された。**

石見銀山ではすでに約100年前に博多の商人が銀抽出の鉛合わせ吹ききの技術を手に入っていた。佐渡金銀山に伝播した。日本海側の伝播が大阪からは隔離されていたことを物語る。

◆京都から商都大阪に進出

理右衛門の泉屋は理兵衛友以に引き継がれ、政友に婿入りし分家を興す。実家の銅吹き、銅細工業で、屋号も実家の泉屋のままであった。やがて住友本家を吸収する。蘇我の本家も廃業し、泉屋に事業を譲る。元和9年(1623)、水運に恵まれ、天下の経済の中心地になりつつある大阪に出て家業を伸ばす狙いからであった。理右衛門が大阪の銅吹き業者に南蛮吹きを伝授していたので、好意で迎えられた。まずは内淡路町で基礎を固め、長堀茂左衛門町に移り、近世住友の本拠地となった。

南蛮吹き一銀を含む粗銅は^{しばり}鋳吹き(南蛮吹き)にかける。まず合吹きによって鉛との合金をつくり、^{しばり}鋳吹き(南蛮吹き)にかけ融点の差を利用して含銀銅から銀を鉛に含ませて取り出し、さらに銀を含む鉛を灰吹きにかけて銀を分離する。^{しばり}鋳吹きにかけて得た銅を^{しばり}鋳銅という。「鋳」の字は住友独特の用字である。一般には「鋳」の字を使う。

第三章 大阪の銅産業と住友

◆大阪に比肩する者なし

長堀の銅吹所は江戸時代を通じて、我が国銅精錬業の中心となった。幕府要人、オランダ商館長が参観している。銅、糸、反物、砂糖、薬種などの貿易で巨額の資力を持つ。やがて両替商を開業し大町人になる。友以から相続した友信から吉左衛門を名乗る。

◆輸出銅の調製地を大阪に限定

南蛮吹きの新技術が大阪に栄えると、抜銀作業の厳密から輸出銅の調製地を大阪とした。全国の輸出用銅が大阪に集められた。大阪の人口30万人のうち1万人が銅関係者であった。

◆銅貿易から銅山経営へ

奥羽地方に銅山が開発されると住友も銅鉱業に広く進出する。銅貿易商人が増えて競争が激化する。幕府は銅名代を16に限定した。大阪が10人で、4人は住友の人間であった。住友は御用銅の1/3を占めた。

第四章 吉岡銅山と別子(立川)銅山

◆吉岡銅山の稼業挑戦

平安初期開坑であるが、乱掘で荒廃した吉岡銅山の再開発に着手する。大規模水抜を開削して一流の銅山として起死回生させる。しかし、江戸での為替事業で失敗して窮地に陥る。

◆別子銅山の発見

吉岡銅山の水抜きの目途が付き始めた元禄3年(1690)、別子に有望な銅鉱床があることが知らされた。調査すると有望なので開発申請を幕府に提出する。競願となったが、資金があり、経験豊富な住友に開発許可が下りた。元禄4年(1691)閏8月1日に別子銅山を開坑する。

大庄屋に断って山に分け入り、苦心参たんの末、ようやく露頭を見付けた。

川之江からの国道は土居に至っていて、国道から天満に枝道が延びていた。天満の庄屋にあいさつをするのは、既に別子山の銅山経営を念頭にして積み出し港の天満を考え、第一泉屋道を想定している。長兵衛の案内で七助が初見聞し、有望とのことで田向重右衛門らが再見分している。二度の見聞を一度にまとめて記述している。

以上のようにも考えられるが、天満村の3/4を納めていた下天満の庄屋の寺尾家は、江戸時代には幕領地大庄屋として宇摩郡の川之江、余木、山田井、下分、三角寺、新宮、具定西寒川、大町、豊田、瓜尻、五良野、野田、中村、藤原、天満、北野、両上野、浦山、別子山、津根山、平野山、小川山、及び新居郡の新須賀、東角野、西角野、立川山、大永山程川山、伊予郡の南神崎の各村々差配していた。第二泉屋道のために西条藩と天領の地替えをした新居郡の新須賀、東角野、西角野、立川山、大永山、種子川山も差配村となっている。新鉱脈の所在地の別子山が差配地であるために、政治的には川之江代官所へ代官の手代に新鉱脈調査の断りをした後に、実務的には現地を差配していた天満の庄屋に調査の断りのあいさつをするために寄っている。

P 2 4 元禄7年の夏、別子銅山に不慮の火災が起こり、立川側の放った向い火との間に挟まれて、支配人の助七以下132人が悲惨な殉職を遂げた。

立川銅山からの向かい火が被害を大きくしたといわれているのは、うわさ話として報告された内容であった。後世へ伝わった誤記である。

元禄7年の大火災で亡くなった132人の内、元締の杉本助七と手代3人は旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下に土葬された。当時はここを蘭塔場と呼んでいた。東臚筆の別子銅山図には、道のそばにそれらしきものが描かれている。残る128人の遺骸は、それぞれ手分けして葬られた。火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在の蘭塔場跡には観音堂が設けられた。

明治11年(1878)、広瀬幸平が4人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は旧別子の蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われている。4人の墓碑を山下に移し、殉職者全員の慰霊の場と変わり、両墓制の「拝み墓」と化した。

銅山略式志の第二図・銅山繁永之図には、牛車道の栄久橋の北詰の西方上部に当たる牛車道の2箇所(折り返しあたり)に墓地がある。歓喜・歓東坑から30m下、西へ150mあたりになる。

第五章 金融業への進出と別子・立川の統合

◆金融業への進出

長崎貿易の主要輸出品が銅になるころに別子銅山が発見された。日本を代表する銅山となった。住友の事業は別子銅山を中心として発展し、更なる発展として多角経営を目指す。延享3年(1747)、浅草で札差店を開業する。

元禄14年(1701)、銅座が開設されて輸出銅を統制する。後には国内用銅、古銅などすべての銅を統制した。

◆別子・立川の統合

寛延2年(1749)に別人名義で譲渡されていた立川銅山を宝暦2年(1762)に併合した。現場が一体化した。

◆幕末の経営危機

別子銅山は阿仁、尾去沢とともに御用三銅山として長崎貿易の輸出銅を供給した。鉱山の宿命として遠町深鋪で経営が悪化する。幕末維新の政治変動が別子銅山にも直接影響する。経営基盤の消失から中橋の両替店、浅草の札差店、長崎分店も閉店する。

第六章 住友中興の元勲 広瀬幸平

◆苦難期の別子銅山

長州再征への献金、御用金の請求、安米払い下げの差し止め、御用銅買上の廃止などで別子銅山は危機に瀕した。別子銅山と新居浜の米蔵は土佐藩兵に、大阪の銅蔵は薩摩藩兵に差し押さえられた。広瀬義右衛門(後の幸平)は、別子銅山は住友家の事業でありその差押えは国家の大計に反すると主張する。川田小一郎の協力を得て家業継続、差し押さえ解除を獲得する。

◆広瀬幸平のおいたち

広瀬幸平は文政11年(1828)、近江の国八夫村に生まれる。9歳の時に、後に別子銅山支配人になった叔父の北脇治右衛門連れられて別子銅山に行く。11歳で奉公に上がる。28歳の時に住友家長の推挙で広瀬義右衛門の養嗣子となる。38歳で別子銅山支配人となる。住友中興の元勲と言われる事業を推進する。

◆揺れ動いた別子銅山

幕末から明治維新への動乱期は、別子銅山も金詰まりで危機に面する。最後の策として別子銅山売却の話が出てくるが、幸平は断固反対して一連の施策を講じて難局を打開する。

◆洋式技術を積極的に導入

外国商館との銅の直取引、銅吹所の立川村移転、本店の富島町移転、人事・勤務・着衣などの改善・改革を行う。改革の第一目標として別子銅山の近代化を推進する。ルイ・ラロックを雇用して別子開発のバイブルである「別子鉱山目論見書」を作成する。日本人の手による開発として職員のフランス留学、小型蒸気船の購入就航、ダイナマイトの使用、コークスの使用、近代機械の使用と近代化を推進する。

67歳で住友家総理人を辞す。87歳で永眠する。

P 3 4 明治5年に別子銅山用物資と産銅の輸送を目的として、木製の小型蒸気船(54トン余)を英国から購入して伊予～阪神間を就航させた。これは住友が所有した最初の蒸気船で、「白水丸」と名付けられた。

ルイ・ラロックは別子銅山のある四国への赴任に当たり和船の脆弱さを理由に乗船を拒んだため住友では、小型蒸気船の「白水丸」を買ったというのは間違いである。

住友が愛媛県へ外国人技師の雇用願いを工部・外務両省へ提出したいので添え状を依頼したのに対して許可が下りたのは明治6年(1873)9月。リリエンター社はルイ・ラロックと既に6月に仮契約書を結んでいた。住友が木造蒸気汽船を購入して白水丸と命名したのは明治5年(1872)11月であるので、ルイ・ラロック雇用前の購入なので間違いは自明である。

第七章 伊庭貞剛と住友の近代化

◆財をとるに道あり

伊庭貞剛は現在の滋賀県近江八幡市に生まれる。33歳の時に官界に嫌気をさし判事を辞していたところ、叔父の幸平の勧めで住友に入る。48歳の時に幸平に代わり諸事業を取り仕切る。51歳の時に総理事心得、54歳の時に総理事に就任する。現実よりも一歩先を先んじ、物心両面の調和を重んじた。「君子財を愛す、之をとるに道あり」を座右の銘とした。住友の伝統的事業精神の「自利利他公私一如」につながっていた。

◆外に人材を求める

明治27年(1894)、煙害問題が起こると、貞剛は本店支配人から別子銅山に転勤する。東延斜坑の竣工、三角の排水、第三通洞開削の着工、製錬所の四阪島移転、本格的植林、山根製錬所の中止及び硫酸・製鉄事業の廃止などを別子で実践した。本店帰任の後は鈴木馬左也に別子支配人を任せた。

二代目総理事として、経営組織・事務処理の合理化、別子銅山の文教しせつの

拡充整備を図った。特筆するのは外部人材の導入で、川上謹一、植村俊平、志立鉄次郎たちを招いた。

鈴木馬左也も小倉正恒、中田錦吉、湯川寛吉といった後の総理事を導入する。右大臣徳大寺家から養嗣子を迎えて家の格式を上げたことが、人材が集まる背後関係としてあった。

◆石山の高士・伊庭貞剛

貞剛は「老人は少壮者の邪魔をしないようにすることが一番必要」と、58歳で総理事を勇退する。その後、大津石山の別邸「活機園」で隠棲し、80歳で永眠する。

雑誌「実業の日本」に所感録「老成と少壮」を発表した。「事業の進歩発展にもっとも害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である。老人も青年も共に社会の勢力に相違ないが、その役割をいふと、老人は注意役、青年は実行役である。」

活機園の設計は野口孫市。(野口は大阪府立中之島図書館、須磨別邸、日暮別邸、心齋橋などを造る。)家屋の木材は、別子職員一同から餞別として贈られたものを使った。活機とは、世俗を離れながらも人情の機微に通じるとの意味である。

第八章 事業は人なり 住友の人材

◆偉大な統率者・鈴木馬左也

三代目総理事に鈴木馬左也が44歳で就任し、19年間大任に当たった。伊庭の経営路線を着実に実現していき、住友の諸事業の近代化を推進し、住友の基盤を盤石なものに構築した。経営方針は「条理を正し、徳義を重んじ、世の信頼を受ける」「国益を先にし、私利を後にする」。国家優先の信念として「正義公道を踏んで、国家百年の事業を計らねばならぬ」と言っていた。

馬左也は現在の宮崎県高鍋町に生まれた。内務省にいたが36歳の時に住友に入る。教養も深く風格のある存在感のある人物であった。まさに大御所。

馬左也は禅や剣に精通していた。箒庵高橋義雄の長恨茶会や益田鈍翁の為楽庵での茶会にも特記されている。

◆女房役に徹した・中田錦吉

四代目総理事は中田錦吉。元治元年(1864)、現在の秋田県大館市に生まれた。裁判所に奉じていたが、37歳の時に住友に入った。鈴木馬左也の入社4年後であ

った。馬左也のブレーンとして活躍する。58歳で総理事になると定年制を制定した。生保界への進出、金融機関体制の確立に尽くす。65歳で永眠した。

◆工業化のリーダー・湯川寛吉

五代目総理事は湯川寛吉。明治元年(1868)、現在の和歌山県新宮市に生まれた。逋信省に奉じていたが、37歳の時に住友に入った。ドイツ語に堪能であった。57歳で総理事になる。鉱山と金融の住友を工業経営に乗り出させた。64歳で永眠した。

◆伝統の人材育成

歴代の総理事は事業を統括するとともに、人材の育成に努めた結果、伝統として逸材を輩出する。

六代目総理事は小倉正恒。明治8年(1875)、現在の石川県金沢市に生まれた。内務省に奉じていたが、24歳の時に住友に入った。55歳で総理事になる。住友の近代化を達成させ、事業の興隆を極めた。66歳で国務大臣に請われて住友を去る。87歳で永眠した。

七代目総理事は古田俊之助。明治19年(1888)、現在の京都市に生まれた。大学卒業の22歳で住友に入った。広瀬以来の住友生え抜き、技術職と言う異例の総理事に53歳でなる。戦中、戦後の困難な時代を統率した。終戦処理で住友本社を解体した。68歳で永眠した。

第九章 住友の諸事業の誕生

◆事業分化の花開く

住友は明治維新に際し、別子銅山の経営に全力を注ぐ。それにつれて各種事業が分化、新設されて財閥が形成される。

工鉱業部門からは、住友重機械工業(株)、住友石炭鉱業(株)、住友金属鉱山(株)、住友金属工業(株)、住友電気工業(株)、住友化学工業(株)、日本板硝子(株)、住友セメント(株)、住友建設(株)、住友ベークライト(株)、住友軽金属(株)。

◆金融機構の整備を図る

明治維新になって並合業の好成績から住友銀行(株)として発足する。(株)住友倉庫、住友信託銀行(株)、住友生命(株)、住友海上火災保険(株)が生まれていった。

◆住友商事の誕生

大阪北港地区で別子銅山での飯米確保から耕地を買う。時勢の変化で工場が建っていく。大阪港の発展、開港から大阪北港(株)が生まれ、住友土地工務(株)となり、

住友建設産業(株)に引き継がれ、商事部門を設けて発足して住友商事(株)となる。
泉不動産株が住友不動産(株)となり、住友林業(株)も生まれた。

第十章 住友精神と社会貢献

◆ 確実を旨とし浮利に趨らず

住友精神は「文殊院旨意書」までさかのぼる。明治15年(1882)制定の住友家法3条が端的に表している。主意は「確実を旨とし浮利に趨らず」である。明治24年(1891)には、「信用を重んじ」が加わった。

◆ 自他利他公私一如

住友事業精神となると「自他利他公私一如」となる。南蛮吹きを秘伝とせず同業者に公開して銀流出話防ぎ国益を図った。別子銅山の永続的採掘法による稼業の仕方にもうかがえる。「自他利他公私一如」は「感恩報謝」と表裏一体である。植林事業、楠公献納、私立大阪商業講習所創立、住友私立職工養成所創設、府立図書館寄贈、鉄鋼研究所設立、私立大阪住友病院開業、大阪市立美術館用地の寄贈、新居浜築港があげられる。

◆ 企画の遠大性

住友精神の特性として「企画の遠大性」がある。広瀬、伊庭、鈴木総理事が常に口にしていた「国家百年の事業を計らねばならぬ」ということである。別子銅山を母体とした諸事業の生成発展に見て取れる。進取敢為の精神は住友の全歴史にみなぎり、有為の人材によって継承されてきた。

資 料 住友の略年表・住友グループの発展略図

コラム すみとの商標

「菱井桁」は、屋号の「泉屋」に由来する。泉の字は清冽な湧水が尽きないこと、貨泉に通じて良縁である。

5. おわりに

「文殊院座像がもう一体ある」との印象が強い小冊子であった。解説を書くに当たって旧版を見ると文殊院の写真が正しく掲載されていた。キツネにつままれたような変な気持ちに陥った。よく調べてみると初版の小版本の再販本を見ていた。

正味52ページの小冊子の内容を小見出し毎に要約していったら、本文とページ数が変わらなくなりそうであった。解説するよりも小冊子そのものを読んでもらった方が理解しやすい。

歴代総理事が出てくると、半世物語、幽翁、鈴木馬左也、小倉正恒、古田俊之助氏追懐録が去来する。

住友商事㈱の職員研修で旧別子を案内しているが、「百聞は一見に如かず」を感じる。小冊子を読んでも、旧別子の歴史遺産を見ると「新居浜に残る住友の心」をつかんでいる。